

玩具を用いた子どもの遊びと 親の関与に関する一考察

村本 宗太郎

(常葉大学教育学部生涯学習学科教員)

/コミュニティ福祉学研究科博士課程後期課程 2018 年修了)

I. 緒言

1. 問題の所在と研究の目的

玩具は国を問わず、子どもたちにとって日常的に遊ぶ身近なものであり、玩具のない状態での遊びと比較した時に、子どもたちの遊びの可能性を拡大させ、遊びに豊かさを与えるものであるといえよう。齋藤 (2015) は玩具について、「『子どもに生きていく力をつける』ためのもの」(齋藤 2015) としたうえで、「『強く』『賢く』『正しく』生きていけるようにするために、その基盤となる感性、身体能力、頭脳の使い方を、遊びの中で楽しく育み、伸ばしていく」(齋藤 2015) ものであるとも指摘する。玩具は単に子どもたちの遊びを豊かにするだけではなく、齋藤の指摘にみられるように子どもが成長していく過程で非常に重要な役割を果たすものであるといえる。

玩具の種類の一つとして知育玩具というものがあるように、玩具と教育との親和性は強い。インターネット上における玩具の大手量販店 (日本トイザラス Online) の知育玩具に関するページの中では、英語・国語・社会・音楽・図工・算数・理科・プログラミング等の様々な種類の知育玩具が、2歳以降を対象年齢として販売されている。この知育玩具の充実が反映するように、家族が幼い時から玩具を用いた教育を積極的に子どもに施そうとする姿勢が看取される。

ここで疑問となるのが、現代の我が国における子どもたちは果たして玩具で「遊ぶ」ことができているのかということである。遊ぶことは、労働とは異なる自己目的的な活動であり、楽しさや面白さのために行われる活動である。この点について井上・菊 (2020) は、「ホイジンは遊びの本質を『面白さ』に求め、遊びに夢中にさせる力をまさにそこに見出しています。それがあからこそ遊びは、遊び手である子どもたちにとって、みずから進んで追及しようとする意味を持った行為となるのであり、それ自体をおこなうことが目的となる自己目的

的な性格の営みになります。」(井上・菊 2020)と論じている。

また、子どもと玩具の遊びに関して、近年様々な場所で散見することのできる様子として、玩具で遊ぶ子どもの周りでスマートフォンに視線を集中させていたり、親同士での会話を楽しみ、遊んでいる子どもに視線を送らない親の姿が挙げられる。このような親の態度について齋藤(2015)は、『『いいおもちゃを買い与えたらそれで安心』ではなく、おもちゃを媒介に、『大人が子どもの遊びにどこまで積極的に関わることができるか』も非常に大きな意味をもつことを忘れてはいけません。』(齋藤 2015)と指摘するが、上記の様子がしばしば見られることは、おとなは子どもの遊びに積極的な関わりがみられないといえる。

ここまで言及した、遊び以上に教育的価値を重視した知育玩具の充実した普及や、玩具を与えることによって子どもを「遊ばせておく」親の存在の増加は、子どもたちを本来の「遊ぶ」ことから遠ざけているのではないだろうか。多種多様な玩具を容易に入手できる時代であるからこそ、子どもが玩具で遊ぶ意味と親の関与について検討を行う必要がある。

本研究の目的は、子どもの遊びの中でも特に玩具を用いた遊びに着目し、玩具で遊ぶ子どもと玩具、及び親の関与について、今後調査を実施するための分析枠組を検討し提示することである。これまでも子どもの遊びという活動については常に教育的な学びが透過しており、「遊ぶ」という本来は目的的な活動が、学ぶための手段的な活動となっているともいえる。この点について、松田(2003)は、「おもちゃはよく教育の手段として取り扱われる。しかし、この点こそが『教育の近代』に生きるわたしたちのある種の囚われであり、現代社会の生活のなかから、『おもちゃで遊ぶ』ことを消失させていくひとつの契機でしかない。おもちゃは『遊ぶ』ための道具であって、『学ぶ』ための道具では決してない。」(松田 2003)と指摘する。玩具で遊ぶ子どもに対し、教育的な効果が得られるように「良い遊び」へと誘導しようとする親の関与について検討することは、今後子どもだけではなく我が国のレジャーやレクリエーションについて検討を行う上でも重要な意義があるといえよう。

2. 先行研究の検討

子どもと遊びに関する研究については様々な指摘がみられるが、特に玩具との関係に着目した研究として、まず渋谷(1980)の研究が挙げられる。渋谷は、玩具を作る立場から玩具の実態や、玩具に対する親の意識、良い玩具のあり方について調査結果を基に考察している。渋谷は、「子どもは、玩具の良し悪しにかかわらずそれらを媒介に自分の遊びを展開している。玩具は子どもの生活にとって大きな位置を占めていると言える。」(渋谷 1980)とし、子どもの生活における玩具の重要性を指摘している。「親の玩具についての意識に関する設問の回答」の

調査結果として、玩具を与える際の親の姿勢として最も多く回答されたものは順に、「主体性、創造性を養うため」、「成長を促すため」、「子どものあそびを満足させるため」であり、親が玩具に対して教育的な意識を強く有していることが看取された。大塚（2020）の研究では、保育者を志望する学生に対する調査を行い、玩具に対する学生の考え方について検討している。調査結果の「学生が考える“いいおもちゃ”の基準」において、学生らは良い玩具として、「能力を伸ばす」という視点が最も重要であると回答しており、「楽しい」という視点を上回る結果となったことを明らかにしている。仙田（1992）は、子どもの遊びと環境に着目し、「子どもの遊び環境には、四つの要素がある。あそび時間、あそび空間、あそび集団、あそび方法である。このどれが欠けても子どもたちのあそびは成立しない。そしてこの四つが複雑に相互に影響し合いながら、時代とともに子どもたちのあそび環境は変化してきている。」（仙田 1992）と指摘している。仙田の指摘にみられる玩具は主に自然の中における人工物ではない玩具を提示している。ここまで先行研究の概観する中で、市販されている玩具で遊ぶ子どもと親の関与や、「遊ぶ」活動と関連させた研究については十分にされているとは言い難く、検討を行う必要があるといえる。

Ⅱ. 分析枠組の検討

1. 「遊び」について

本論における分析枠組の検討にあたり、分析枠組を構成する要素として、「遊び」と「玩具と子どもの関係」について概観したうえで、「子どもと玩具の遊びと親の関与」について検討を行う。

まず「遊び」については、人にとっての「遊び」とは何かという視点から、シラーやスペンサーの「余剰エネルギー説」を最初期として、これまでに多くの「遊び」論に関する研究が行われてきた。「遊び論」に関する研究の中でも、ホイジンガは「人は何のために遊ぶのか」といった議論を越え、「面白さ」や「楽しさ」を追求することを本質とした活動が「遊び」であると主張し、「遊び」の文化性に言及している。この点について井上（1995）は、「ホイジンガやカイヨワは、『遊び』を卑俗な日常生活から切り離して理念化し、生活を超越生活を導く範型としての『文化』に関連づけてとらえた。」（井上 1995）と指摘している。ホイジンガに続き、カイヨワはホイジンガの「遊び」論を基にして批判的な検討を加えながら「遊び」論を展開した。カイヨワは、「遊び」という活動に対する基本的な定義として、以下の6つの項目を挙げている。（カイヨワ 1990）

- ①自由な活動。すなわち遊戯者が強制されないこと。もし強制されれば、遊びはたちまち魅力的な愉快な楽しみという性質を失ってしまう。
- ②隔離された活動。すなわち、あらかじめ決められた明確な空間と時間の範囲

内に制限されていること。

- ③未確定の活動。すなわち、ゲーム展開が決定されていたり、先に結果が分かっていたりしてはいけない。創意の必要があるのだから、ある種の自由がかならず遊戯者の側に残されていなくてはならない。
- ④非生産的活動。すなわち、財産も富も、いかなる種類の新要素も作り出さないこと。遊戯者間での所有権の移動をのぞいて、勝負開始時と同じ状態に帰結する。
- ⑤規則のある活動。すなわち、約束ごとに従う活動。この約束ごとは通常法規を停止し、一時的に新しい法を確立する。そしてこの法だけが通用する。
- ⑥虚構の活動。すなわち、日常生活と対比した場合、二次的な現実、または明白に非現実であるという特殊な意識を伴っていること。

カイヨワは、以上にみられる「遊び」に関する定義に加えて、「遊び」の種類についても4つに分類分けをしている。分類分けとはそれぞれ、アゴン（競争）、アレア（運）、ミミクリ（模倣）、イリンクス（目まい）である。本研究における、玩具を用いた子どもの遊びはカイヨワの提示する遊びの定義及び、種類に該当するものとして進める。

2. 「玩具と子どもの関係」について

次に「玩具と子どもの関係」に関して、初めに「玩具」の定義について検討する。「玩具」は広義の意味では「遊びのための道具」であり、好奇心旺盛で自由な発想を有する子どもにとっての「遊びのための道具」と考えると、世の中における多くのものが玩具となる可能性を有している。しかし、本研究では子どもの自由な発想に基づく玩具までは含めず、市販されている玩具を対象とする。なお、本論での引用部では「おもちゃ」という表記がみられるが、本研究では玩具とおもちゃは同一のものとして捉える。

次に、玩具と子どもの関係について着目したときに、櫻田（2009）は、『「おもちゃ＝子どものもの』という図式が成り立ったのは、フランスの思想家ジャン・ジャック・ルソーが『エミールまたは教育について』の中で、子どもの人権・人格を尊重し、教育を受ける権利を説くと、その教育に使うツールの一つとしておもちゃの効能が注目されるようになってからだ。』（櫻田 2009）とし、玩具と子どもの教育との関係について言及している。ルソーの遊びに対する考え方に関連し、栗原（1996）は子どもの育つ権利について着目し、ルソーは、子どもが自己完成能力（perfectibilité）を有していること、自己完成能力が他者との相互性なしには開花することはないこと及び、遊びと他者とのコミュニケーションについて言及をしていることを論じている。

ルソーの後に、玩具と子どもの教育との関係について言及した人物の一人とし

てフレーベルを挙げることができる。フレーベルは、教育の中における遊びの価値を重視し、教育玩具としての「恩物」を考案している。さて、我が国における玩具と子どもの関係について、多田（2011）は、「日本で初めて教育玩具という言葉が登場したのは、明治維新以降で、政府の教育政策として積極的に西欧先進国の制度・思想が導入され」、「1876（明治9）年に、東京女子師範学校（現：お茶の水女子大学）に附属幼稚園が開設され、ドイツのフレーベルの教育思想及び教材が取り入れられました。」（多田 2011）とし、教育を目的とした玩具の導入について言及している。

ここまでの「玩具と子どもの関係」について検討すると、玩具が子どものものとなる過程においては、「遊び」のためのものであることと同時に、教育的効果を期待した玩具として与えられてきた様相が看取された。このことが、現在も知育玩具が多く発売され、遊びに教育を求めやすくなっている背景であることが推察される。

3. 子どもと玩具の遊びと親の関与について

子どもと玩具の遊びと親の関与について、松田（2003）は、まずピアジェとワロンの議論に注目しながら検討を行っている。すなわち、「子どもが個体から出発して社会化されていく」（松田 2003）ピアジェの「個体主義的発想」に関連して図1を提示した。松田は、子どもが玩具で遊ぶ行為に対して、「私たちはよく『子どもが、おもちゃを使って、自由に遊んでいる』と見る。つまりここには『個としての存在である＝主体としての子どもが、対象としてのおもちゃに働きかけている』ということが『おもちゃで遊ぶ』という行為の基本形だ、という暗黙の前提が潜んでいる。」（松田 2003）と論じており、子どもと玩具の遊びに関しては、主体としての子どもが玩具を使って遊ぶという二者関係が原則であり、遊びに関与する他者や玩具の種類等は二者関係を取り巻く副次的な要素でしかない（松田 2003）と指摘する。

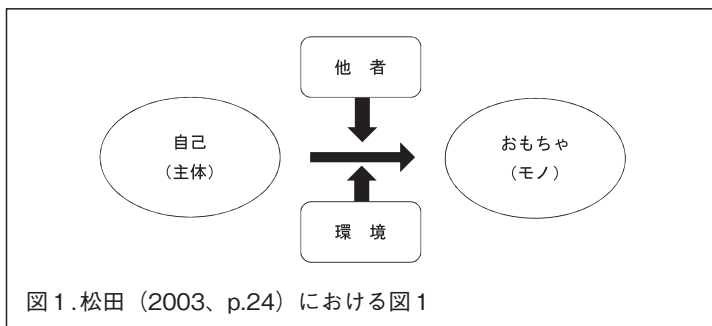


図1.松田（2003、p.24）における図1

図1にみられる子どもと玩具の関係に対して松田は、『おもちゃで遊ぶ』という行為は、『子どもが、おもちゃを使って、自由に遊んでいる』というよりも、『子どもが、他者（他の人）とモノ（おもちゃ）と自己が溶け込む、という独特の関係のなかにある』と見たほうが、より状況を伝える言葉としては正確」（松田2003）とし、子どもと玩具の関係について図2を解説する。

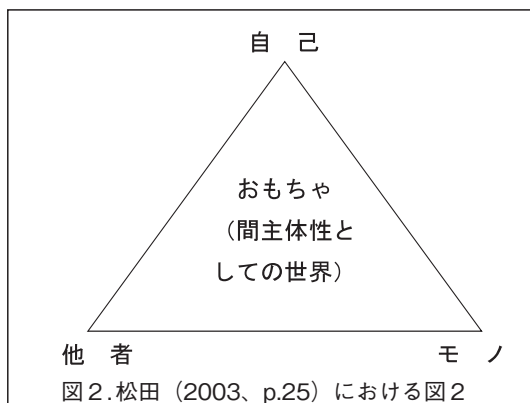


図2について松田は、『自己』『他者』『おもちゃ』が『溶け込む』状態、つまり『おもちゃの三角形』（図2）の面積部分こそが、『おもちゃで遊ぶ』ということの間主体的な実態」（松田 2003）であり三角形が玩具で遊ぶ世界であり、玩具を玩具たらしめると指摘する。松田は、子どもが玩具を使って遊んでいるのではなく、自己と他者、玩具を交えた三角関係が溶解体験（「なにかに夢中になることで自我を解き放ち、『個』という輪郭が解消されてしまう体験」（松田 2003））している状態が玩具で遊んでいる世界であることを指摘する。

子どもと玩具の関係について三角形で論じることに関しては、竹谷（多田2011）も乳幼児の成長発達と玩具について、『子ども』『人』『もの』のトライアングルの関係の大切さを強調します。子どもは、母親、父親、を中心とする『人』との関わりの中で成長し、さらに、おもちゃや絵本などの『もの』との関わりも加えた三角形の関係が子どもの成長に大きな役割を果たす」（多田 2011）とし、子どもと玩具と親の関係について三角形で捉えることに言及している。

子どもと玩具と親が関係する三角形の関係について、ここまで松田（2003）の論を基に内容を検討してきたが、それでは子どもたちの親は三角形の関係における他者として、具体的にどのような態度を取り、役割を担っているのかということに着目する。この点に関して松田は、ピノチオ館（松田の文献にみられるレジャーパーク内のパビリオンの一つ）に入館している「おとな」について態度が

3つみられるとし、「自分も、いろいろなおもちゃを触っているか、あるいは壁にもたれて休息したり寝たりしているか、子どもの遊ぶ姿をビデオやカメラで撮影しているか、である。」(松田 2003)と説明する。そして親の態度はそれぞれ異なっているながらも、「子どもたちからの『見て見て』とか『いっしょに遊ぼう』というサインが送られたときには、かならず反応すること」(松田 2003)は共通する反応であるとしている。

このおとなの態度について松田(2003)は、三角形の関係の中にいる子どもは、玩具で遊んでいるうちに玩具の三角形に溶け込んでいる状態からしばしば覚醒し、家族が三角形の中にいるかを確認し、確認ができれば三角形に戻っていくと解説する。そして、この三角形の中には、子どもや玩具に対する態度に関わらず、おとなも実は含まれているとし、おとなが積極的に子どもの遊びに対する態度を示さなくとも、三角形の中にいることこそが子どもに安心感を覚えさせるものと論じる。そして、玩具で遊ぶ子どもと親の関与について、直接の対面や関わりは必要なく、親がどのような態度を取っているかも関係がなく、おもちゃの三角形の内側にいることを子どもに了解を与えられれば、「子どもと家族の間に『溶け込み』という絆がすでに成立」(松田 2003)と主張する。

子どもと玩具の遊びと親の関係について松田は以上のように論じている。しかし、親が玩具の三角形の一部とする同一空間にいることで、子どもと親の遊び体験が共通するものという指摘については疑問が残る。松田の研究では遊びの場がレジャーパークという非日常の場であるため、強制的に「遊」の領域に溶け込みやすく、親が積極的な態度を示さなくとも三角形の他者に該当することが考えられる。しかし、日常の遊びの場でしばしば見られるのは、教育的な効果を期待して知育玩具を買い与える親であり、玩具を子どもに与え、子どもからのサインに対しても反応をしない親の存在である。彼らでさえも子どもが確認さえできれば同一の三角形の関係の中に位置するかということを考えると、松田の指摘とは異なる場に位置している感覚を子どもは覚えるのではないだろうか。このような親の態度がみられる状況を踏まえて改めて検討を行うと、玩具に関する三角形だけでは説明ができない親の関与が現れるといえる。そこで、三角形の関係を基に本研究における分析枠組を検討する。

4. 分析枠組の提示

子どもと玩具の遊びと親の関係についてみられたここまでの内容を踏まえ、本研究における分析枠組について検討する。分析枠組を検討するうえで重要となるのが、子どもと玩具の関係における三角形の他者として位置しない親の関与である。子どもの玩具を用いた遊びに対して主体的な態度を全く示さない親は、玩具に対して主体的に向かい合っている子どもと比較すると、異なる領域に位置して

いることが考えられる。ここでの異なる領域について、「聖—俗—遊」の各領域の考え方を援用する。カイヨワ（1990）や井上（1977）は、人間の遊びについて、「聖—俗」の二項図式から「聖—俗—遊」の三項図式として提示している。この図式に関し、椎野（2011）は、「遊なるものは聖なる領域の義務や拘束（まじめ）からも、俗なる領域の規範や実利（日常生活の現実）からも区別された独自の『楽しみ』の秩序領域なのである。」（椎野 2011）と論じている。

子どもと遊びに関する三角形の関係に対して、「聖—俗—遊」の図式を加えると、玩具と玩具で遊ぶ子どもに対して極めて近接した場所に位置し、あたかも同一領域での他者という存在として遊びの三角形の中に位置するとみられる親の立ち位置は実は異なるものと考えられる。

「遊」の領域にいる子どもは、自己目的的に玩具で遊んでいる。三角形の関係の中における「他者」である親の中で、子どもの遊びに対して主体的な態度を示している親は子どもと同一の「遊」の領域で「遊んで」いるものと捉えることができる。しかし、玩具を用いた子どもの遊びに対して近接した場所にいなながらも、規範や実利を求める親の立ち位置は、「俗」の領域にあり、「遊」の領域の子どもや玩具、一緒に遊んでいる他者を監視している立ち位置であると考えられる。このような態度をみせる親は、「遊」の領域にはおらず、領域内における他者にはなりえていないと推察できるのではないだろうか。これらの関係を提示しているのが図3で示した本研究における分析枠組図である。

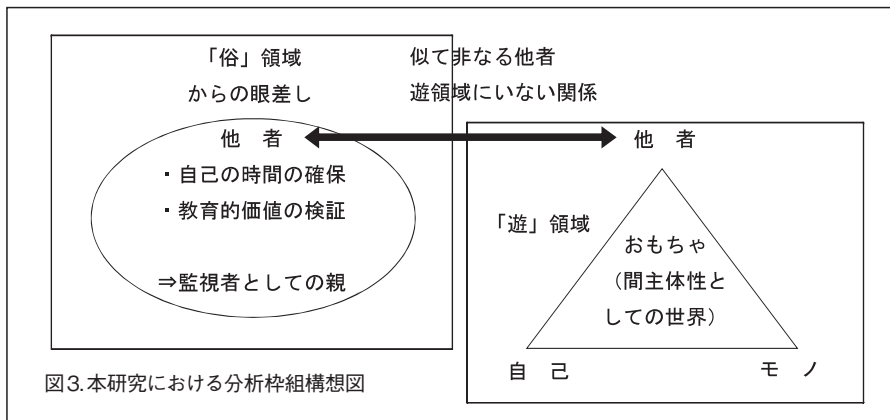


図3.本研究における分析枠組構想図

「俗」の領域に位置する、他者としての親が子どもに対して示す態度としては、親の考える規範や実利を求める意識が現れた態度であると考えられる。例えば、「自己の時間の確保」は、玩具を親の時間を確保するための手段として子どもに与え、「遊ばせる」という態度である。これは、子どもが玩具で遊んでいる際に、スマートフォンや大人同士の会話に没頭している親などの姿が想定される。この

場合の親は、遊びの場に子どもと一緒にいることによって三角形の関係の中に入ることができ、「遊び」が成立すると捉え、子どもを「遊ばせた」ことに満足し、子どもと遊んだと錯覚してしまうことが考えられる。

次に、「教育的価値の検証」は、子どもの遊びに対して主体的な視線を送っているものの、それは玩具の教育的価値が子どもに現れているかということを確認するための姿であることが考えられる。この場合の親は、子どもの遊びに対して教育的な効果の実感のための手段として玩具を捉えるため、玩具の提示する趣旨通りに「遊ばせる」ことが想定される。その結果、親は子どもとの遊びに積極的に参加しているように見えるものの、親にとって理想的な子どもの遊びになるよう細かな修正を子どもに施すため、子どもの遊びに対する指導者としての態度を取っていることが推察される。

以上にみられる、「俗」領域からの親の子ども玩具遊びへの関与では、確かに子どもは親の態度に関わらず玩具に没入しており「遊んでいる」。しかし、親は子どもと同一の「遊」の領域にいないため、子どもとの三角関係の中には位置せず、子どもとのコミュニケーションとしての「遊び」という関係でみると不成立の状態となっていることが推察される。

Ⅲ. 分析枠組に対する先行研究の比較考察

次に、前章で提示した分析枠組に基づいて、子どもと玩具の関係について論じられた先行研究に関し検討を行い、これまでの子どもと玩具及び親の関与について検討を行う。

1. 渋谷（1980）の調査結果との検討

渋谷（1980）は、3歳から5歳の幼稚園児311名の父兄に対して玩具に関するアンケート調査を実施している。調査項目としては、玩具の所有内容、玩具の嗜好、親の意識に関する事項、親の意見、希望に関する事項等が挙げられている。

調査結果に関し、先行研究でも提示したように、「親の玩具についての意識に関する設問の回答」では、玩具を与える際の親の姿勢として最も多く回答されたものが、「主体性、創造性を養うため」（67.0%）であり、次いで「成長を促すため」（48.4%）であり、その次に「子どものあそびを満足させるため」（39.9%）という結果となっていた。この結果に対して渋谷は、親の玩具に関する意識として子どもにとって「非常に教育的に考えられているようである」（渋谷 1980）と分析している。

さらに、「親が玩具を買う時の具体的な考え方」では、「成長の段階に合っているかどうか」（75.5%）が最も高い割合を示しており、次いで「危険でないかどうか」（73.6%）、「子どもの希望の玩具だから」（58.1%）という結果であった。この

結果に対して渋谷は、「親の玩具についての意識に関する設問の回答」の分析結果を踏まえながら、「教育的な姿勢と共通する」（渋谷 1980）と分析している。

渋谷の調査結果において、子どもの玩具に対する親の意識は、渋谷が指摘するように遊戯性の重視よりも教育的価値を重視しているといえる。この結果について本研究における分析枠組に基づいて検討を行うと、子どもの玩具に対する親の意識は、玩具で遊ぶことそのものを目的的に捉えた「遊」の領域における関与ではなく、玩具を手段とした教育的価値の検証を行おうとする、きわめて「俗」の領域からの関与であると考えられる。

2. 大塚（2020）の調査結果との検討

大塚（2020）は、保育者を志望する大学1年生47名（男性7名、女性40名）を対象として、学生の玩具（大塚（2020）では「おもちゃ」と表記している）の体験や、玩具に対する考え方を明らかにする調査を実施している。調査項目としては、これまでに体験した玩具の名前と時期、どのような玩具が「いいおもちゃ」であるかということに関する考え、玩具選びで配慮すべき点等が挙げられている。

調査結果に関し、「学生が考える“いいおもちゃ”の基準」に着目した。その結果として、学生らは、良い玩具として、「能力を伸ばす」という視点が最も重要であると回答していた（47名中22名）。この点について大塚は、「遊びと学びの関係についての講義を行った後に、今回のおもちゃの授業実践を行ったために、“遊びを通した学び”の視点が多かったと考えられる」（大塚 2020）と分析している。良い玩具という設問に対する結果としては、「楽しい」という視点は47名中17名で、「能力を伸ばす」という視点よりも少ない結果となっていた。この結果に対して大塚は、「意外であった」とし、「単純な楽しさ以上に、何か付け加わるものがあるべきという学生の考えがあるのだと考察できる」（大塚 2020）と分析している。

次に、玩具選びで配慮すべき点として、学生は「安全性」を最も高い割合で選択していた（47名中42名）。一方で、「“いいおもちゃ”の基準では多かった『能力を伸ばす』かどうかの視点は、47名中9名」とする結果となっている。この結果に対し大塚は、「子どもへの配慮として、まず安全性が大切にすべきである」という考えを学生が持っていることが分かる。安全性は子どもたちが楽しく遊ぶ前提となるものであり、欠かせない視点であるが、それだけではおもちゃ選びの配慮としては不十分である。」（大塚 2020）と指摘している。

大塚の調査結果から、保育者を志望する学生たちにとって玩具の志向性は、学びを見据えたものにあるということが明らかとなった。この結果について本研究における分析枠組を視点として検討を行うと、将来保育者となる学生にとっても、玩具の重要性は遊びに没入する楽しさではなく、遊びの中で養われる教育的な効

果にあったと推察される。親でない学生たちも、子どもの遊びに教育的価値を重視していることは、子どもたちにとって「遊」の領域のものである玩具が、「俗」の領域に取り込まれているという結果を顕著に表す結果となったといえよう。

IV. 結論と今後の課題

1. 本研究における結論

本研究の目的は、玩具を用いた子どもの遊びに着目し、子どもと玩具、及び親の関係について今後調査を実施のための分析枠組を検し提示することであった。本研究で分析枠組を検討するにあたっては、松田（2003）の論述にみられた、「自己」、「他者」、「玩具」が関係しあう三角形の関係に基づいて検討を行った。結果として、子どもと玩具、及び親が関与する三角形の関係の成立は認められるものの、玩具を教育手段として把握する親や、同じ場にはいるものの子どもの玩具で遊ばせておく親は、同一領域の三角形の中にはいないものと考えられた。以上にみられた親は、「遊」の領域ではなく、きわめて規範的かつ実利的な「俗」の領域に位置し、監視者としての眼差しを子どもの遊びに向ける、子どもの遊びと同一領域には位置しない他者という存在になっていることを推察された。

2. 今後の研究展望及び課題

今後の研究展望として、今回設定した分析枠組に基づいて調査項目を設定し調査を行うことを想定している。親子だけではなく、学生へも調査を行うことによって、玩具を用いた遊びに対して、どのような意識を有し、遊びの三角形の関係へどのような関与をするのかということについて検討することも、今後我が国における子どもの遊びについて検討する上でも重要であると考えられる。

最後に今後の課題を挙げる。まず玩具の範囲について、今回は玩具として市販されているものを想定して検討を行った。しかし、子どもの自由な発想に基づけば、自然の中では石や木も玩具となりうる。子どもにとっての玩具の領域についても再度検討を行う必要があるといえる。次に玩具で遊ぶ子どもの範囲について、本研究において想定した「子ども」は比較的低年齢を想定しているが、年齢が上がってからの玩具を用いた遊びについても検討する必要があるといえる。今後の研究展望で提示した研究を進めながら以上の内容も今後の研究課題とし検討を行うものとした。

引用参考文献

- 深谷和子・田島満利子（1971）「3才児の心理、身体的研究（5）：母親の玩具選択行動と子どもの性差」。日本保育学会大会発表論文抄録（24）：pp.213-214。
ホイジンガ（高橋英夫訳）（1973）『ホモ・ルーデンス』中央公論新社。
井上俊（1977）『遊びの社会学』世界思想社。

- 井上俊編著 (1995)『仕事と遊びの社会学』岩波書店.
- 栗原彬 (1996)「教育とは何か—または育つ権利の擁護」. 井上俊編著 (1996)『こどもと教育の社会学』岩波書店: pp.175-190.
- 松田恵示 (2003)『おもちゃと遊びのリアル』世界思想社.
- 皆本麻実 (2018)「『遊び』をめぐる一試論—民族・社会・宗教との関連から—」. 京都大学大学院教育学研究科紀要64: pp.153-163.
- 日本大学レジャー・レクリエーション研究会 (2015)『これからのレジャー・レクリエーション余暇社会に向けて改訂2版』弓箭書院.
- 日本トイズラス (Online)「知育玩具」. <https://www.toysrus.co.jp/cat001040/> (2020年8月30日最終閲覧).
- 西本美節 (1969)「幼児の玩具に対する母親の取り扱い方について」. 日本保育学会大会研究論文集 (22): pp.51-52.
- 西本美節 (1984)「幼児の玩具に対する母親の態度」. 日本保育学会大会研究論文 (37): pp.596-597.
- 西本望 (2012)「おもちゃ (玩具) の循環社会での意義: こどもの発達と玩具での遊び」. 廃棄物資源循環学会誌23 (8): pp.180-189.
- 大塚紫乃 (2020)「保育者志望の学生のおもちゃに対する考え方」. 江戸川大学こどもコミュニケーション研究紀要2: pp.27-32.
- ロジェ・カイヨワ (多田道太郎・塚崎幹夫訳) (1990)『遊びと人間』講談社.
- 齋藤孝 (2015)『遊ぶ力は生きる力』光文社.
- 櫻田純 (2009)『面白すぎる『おもちゃ』研究序説』中経出版.
- 仙田満 (1992)『子どもとあそび—環境建築家の眼—』岩波書店.
- 渋谷寿 (1980)「子どもの玩具におけるデザインコンセプトへのアプローチ (第1報)」. 名古屋女子大学紀要26: pp.189-197.
- 椎野信雄 (2011)「遊びとゲーム—遊びの貧困の所以—」. 湘南フォーラム: 文教大学湘南総合研究所紀要15: pp.27-41.
- 多田千尋 (2011)『スーパーアドバイザーになるためのおもちゃコンサルタント入門1』黎明書房.
- 多田千尋 (2011)『スーパーアドバイザーになるためのおもちゃコンサルタント入門2』黎明書房.
- 渡辺潤編 (2015)『レジャー・スタディーズ』世界思想社.